

(英語：フォニックス指導)

コミュニケーション活動を支える読みの力の育成 ーフォニックス指導を中心にー

大阪市立真田山小学校 増渕朱美・川村奈美・宮川美穂

1. 主題設定の理由

平成26年度より、『コミュニケーション活動を支える読みの力の育成 ーフォニックス指導を中心にー』を研究主題とし、15分間のモジュール時間を活用した英語学習の研究を進めることとした。その理由を、子ども達の実態と子ども達を取り巻く社会情勢の視点からの分析を通して述べることにする。

本校では、学校教育目標に『心豊かで、進んで課題に取り組むたくましい子どもを育てる』を掲げ、めざす子ども像を「進んで課題に立ち向かい、ねばり強く取り組む子」、「思いやりをもち、互いに支え合う子」、「強い意志をもち、自ら体を鍛えようとする子」の3点とし、その実現に向けて、教科の基礎・基本を基盤に、研究の成果を各教科・道徳・領域に生かしながら、日々の教育活動を進めている。

子ども達の実態に目を向けると、本校の子ども達は、与えられた課題には素直な気持ちで前向きに取り組むことが多い。一方で、自分から学ぼうとする意欲や態度が十分に育っていないと感じた。そこで、与えられた課題に素直に取り組むよさを生かしつつ、進んで学ぶ経験を積み重ねさせたいと考えた。

次に、子ども達を取り巻く社会情勢に目を向けると、平成25年9月に、2020年(平成32年)の東京オリンピック・パラリンピック開催が決まり、日本国民の大きな関心を集めた。同年12月には文部科学省が、グローバル化に対応した英語教育実施計画を発表した。大阪市においては「英語イノベーション事業」を平成25年9月より実施している。本校は、この「英語イノベーション事業」の重点校となっている。

子ども達の実態に関連した視点と、子ども達を取り巻く社会情勢の視点からの分析を通して、進んで学ぶ経験を積み重ねることと、グローバル化する社会に対応する英語力育成の必要性が明らかになってきた。そこで昨年度より『コミュニケーション活動を支える読みの力の育成 ーフォニックス指導を中心にー』を研究主題とし、15分間のモジュール時間を活用した英語学習の研究を進めることとした。

コミュニケーション活動を支える読みの力とは、フォニックス指導を通して子ども達が英語の文字を読めるようになる手がかりをつかむことである。今まで指導者に伝えられるまで気付かなかった英語の単語や文章表現を、本や掲示物の文字を見て、自分から発音しよう、読んでみよう、学んでみようとする力になると考えている。その結果、語彙や表現が増え、コミュニケーション活動の広がりが期待される。また、モジュール時間の活用により、読んでみよう・学んでみようとする経験が積み重ねられていく。この研究主題に迫るために、ただ単にフォニックスルールを説明したり、教えたりするのではなく、歌やチャンツ、本の読み聞かせなどの活動を通して、英語の音声に十分に慣れ親しませながら、英語の文字と音の関係に対する気付きを促したり見守ったりしていきたいと考えている。

2. 研究の柱

研究主題に迫るため、下記の4点を中心に研究を進めることとした。

① All English による指導

音源を活用しながら、All English による指導を行い、英語の表現に慣れ親しませる。

② 子どもとのやり取り

input 中心ではあるが、聞かせたり、指示に従わせたりするだけでなく、子どもとのちょっとした英語での会話を必ず取り入れ、英語の音に対する認識力を高める。

③ 発達段階に応じた取り組み

低学年：体を動かす

中学年：心を動かす

高学年：頭を動かす

発達段階を十分に考慮して指導し、児童の興味・関心を育む。

④ 活動の工夫

繰り返しの学習のため子ども達の意欲を大切にし、変化のある繰り返しを心がける。また、児童の実態に応じて、抵抗感が少なくなるように教材を提示したり、発展的な内容も取り入れたりし、学習意欲の向上を図る。

3. 研究の成果

① 文字・音韻の認識力

大文字、小文字の認識力や、それぞれの文字がもつ音を認識する力が向上した。高学年では文字をつなげて、自分から読んでみようとする姿が見られた。

② あいまいさに耐えて聞く力

一つ一つの英語の意味を全て分かっていくのではなく、英語を聞いて分からない・あいまいな部分があっても、だいたいの意味をとらえたり、「内容はこうかな。」と推測したりしながら聞く力が育ってきている。

③ 語彙力

語彙が増え、知っていたり使えたりする単語や表現の幅が広がってきている。

④ 文で答えようとする力

指導者の質問や問いかけに対し、単語ではなく文で答えようとする児童が増えている。

4. 今後の課題

① 気付きを待つ姿勢

今後も気付きを待つ姿勢を大切にすることを共通理解したい。不安や緊張の高い状況をできるだけ避け、安心して学べるようにしながら、一方的に説明して教えるのではなく、気付きを待つ姿勢を今後も継続したい。

② 児童同士のやり取り

児童が児童の言葉に反応できるように導いていきたい。例えば “I like apples.” “Me, too.” のように。この場合も、発話を急がせるのではなく、ゆっくりと見守り、褒めながら培っていきたい。